

魯迅作品「離婚」論

永井英美

〈序〉

魯迅の小説では、しばしば主人公もしくは語り手が、思想や生き方の根幹に關わる問いを突きつけられている。例えば祥林嫂に靈魂や地獄の存在について問われる「祝福」の「私」は、その典型である。「孤獨者」魏連受は、困窮し生について自問し生き方を曲げることを決意する。「傷逝」では、自由戀愛による結婚を達成した新時代の青年涓生が、結局相手の女性を死に追いやるという窮地に立ち、「悔恨と悲哀」即ち辨明を綿々と書き綴る。彼らは試練に採まれ、うわべを剥ぎ取られ、隠し隠されていたものが明るみに出される。

『彷徨』の末尾を飾る作品で、一九二五年に書かれた「離婚」でも、主人公愛姑はやはり追い詰められ危機に直面している。本稿では〈一〉まず作品の梗概をまとめ、〈二〉愛姑は何に追い詰められどのような危機に直面しているのか、〈三〉それにいかに立ち向かい、〈四〉どのような結末を得たのか、そしてそれはどんな意味をもっているのかなどを探ることで、作品離婚を論じてゆく。

本作品はこれまで長い間、愛姑が封建勢力に敗北する「悲劇」と捉

えられがちであった。また近年では、愛姑が粗野で横暴、そして封建勢力に反抗しながら頼り、結局屈服したとして、これらを彼女の缺點弱さと捉え、魯迅が國民性の負の部分を批判したのだ、とする論も出ている。しかし果たしてそうだろうか。そのようなことも視野に入れつつ、この作品を論じたい。そして本作品は例えば「祝福」「孤獨者」「傷逝」などのように単獨で論じられることが多くない。本稿がこの作品を巡る議論の契機になれば、と考える。(本稿において引用文中の「」は、全て引用者による。魯迅作品からの引用は一九八一年人民文學出版社の『魯迅全集』を用い、「離婚」は初出『語絲』第五四期一九二五年十一月二三日、と照合した。魯迅作品以外で引用が複数回になる参考文献は、注の後にまとめた。)

〈一〉梗概

作品は大きく前後半の二部に分けられる。前半部では清末民初らしいとある正月、沿海地方の村に住む主人公愛姑と父親莊木三が乗合船(川船)に乗り込む。船客との會話から、二人が丸三年採めている愛姑の離婚問題のために仲介役の慰老爺の屋敷に向かうこと、この日はより大きな力をもった七大人が同席の豫定であることなどが浮かぶ。

後半部は慰老爺宅の客間が舞臺である。愛姑は夫側が理不盡で自分には落ち度がないことを七大人に認めて貰いたいが、彼は味方をしてはくれない。父親も黙っており、追い詰められた愛姑は夫や婚家に對する悪口雑言をまくし立て、口を挟んだ夫と罵り合いになる。それがクライマックスに達した所で、七大人が突然奇妙な大聲を出す。愛姑は思わず口をつぐみ、離婚に同意する意味の言葉を口にする。

△△ 愛姑が直面しているもの

作品の始まりは實におだやかである。莊木三と愛姑が船に乗り込み、同村の者らしい男八三ら船客と、おめでたく新年の挨拶を交す。

「やや、木叔。あげましておめでとうございませう。」

「こんにちは、八三。おめでとう。……」

「ああ、おめでとうございませう。愛姑もごいっしょで……」

しかし續く八三との會話が、愛姑の直面している事態を明らかにする。莊木三が「龐莊に行く」と言った途端、船客はみな沈黙して父娘の方を見る。船中の人々は二人を見知っており、もめ續けている愛姑の離婚問題の経緯も、のみ込んでいるらしい様子である。父娘がこの日向かうのは、その仲介役の慰老爺の屋敷である。

八三に「愛姑が向こう「婚家」へ戻ったって、實のところ何も面白くないことはないし……」³と言われた愛姑はぶんぶん怒り、次のように答える。「あたしやなにもあっちへ戻りたいわけじゃないよ、八三さん！」「あたしや意地なんだよ」⁵。

舊い農村社會の女性である愛姑が、婚姻問題を巡ってどこまで「意

地」(原文「賭氣」)を通せるか、これが即ち本作品で愛姑が突きつけられている問いである。

しかし彼女の前には大きな力が立ち塞がっている。今回は町から七大人もやって来る。それを聞いて八三は目を剥いて驚き、こう言つて視線を落とす。「あのお方までお出ましになつてものを言いなさるんで……。……そいつは……。實のところ、去年あつしらが向こうの竈をみんな壊しちまつて、まあ、もう何とか恨みは晴らしたわけでしょう」³。ことは單に婚姻を巡る騒動ではなく、集落對集落の、實力行使を伴う對立——械闘、に發展しているらしいことがわかる。八三もそれに參加した模様である。彼が七大人の出馬を聞いてぎくりとするのも、事はわが身に關わるからである。

仁井田陞「中國の同族部落の械闘」によれば、中國では「部落間の争」が起ると、このような「衆を集め械即ち刀・銃などの武器をとつて闘う」「實力解決の手段」に出ることがあった。「鬪徒の構成分子は」「子弟や小作人のみならず」外部から雇入れることもあった。當時「公權力は到底深く部落内に及び得なかつた」。また長引くと世代を越えて「世仇」に發展する場合も少なくなかつた。しかしときには地方の「有力者」「顔役」によつて「仲裁又は調停が行われ、和解の成功する場合もあつた」という。(仁井田三五八—三六二頁)。仁井田は昭和十八年、北京で周作人教授からその郷里の竈をぶちぬく械闘について教えてもらったと、その詳細を述べる。³

岸本美緒によれば、明清時代「地方の名士」は、次のような存在であつた。「地方の名士たる『紳士』『郷紳』が「中央から派遣される」地方官と比肩しうる權威をもつて地方社會にならびたち」、「特に清末、中央政府の弱體化に伴つて、彼らは地方防衛や公共事業を地域社會の

中核となつて組織し、地方行政を實質的に擔う存在となつた」(岸本二七、二八頁)。

「知事さま」と「義兄弟のちぎり」を交わしたという七大人も、このような地方社會の有力者である。後で慰老爺が愛姑を説得するために述べる「府まで訴え出たつて、お役所が七大人にお伺いしないわけはあるまい？」という言葉は、單なるおどしではない。

莊木三によればこの騒動は「もうまる三年も揉めて、何回も喧嘩をし、何度も和解の話が出たのに、いつまでも片付かない」という。今回七大人が乗り出すのは、婚姻問題だけではなく、長引いて部落間の争いにまで發展したいざこざを調停する役割も擔つていたと思われる。また七大人にとっては、自分が出た以上必ず仲裁しなければ面子が立たず、どうしても愛姑を説得する必要があつた。

このように本作品は、地方の共同體の、部外者には到底割つて入れぬ奥深い所を垣間見せてもいる。莊木三は船中の相客でおべっか使いの汪得貴から「海沿いの三六十八ヶ村、誰知らぬ者のない」「どんな大きなお屋敷にでも入つて行けるお方」と言われる立場にある。莊木三が船に乗つた途端、客はさつと席を詰めてくれ、二人のためにたつぷり四人分もの空間ができる。拱手の礼をする者もいる。船頭も丁寧な口をきく。慰老爺には「老木」と呼ばれ、その老爺の再三の仲介は意に介さない。しかし七大人が同席する今回は勝手が違ふ。愛姑もまた慰家に到着すると、氣詰まりを感じて船中での強氣は消える。慰老爺も父親も怖くない愛姑も、七大人に對しては不安を覺え始めていた。だが、七大人に向けられた人々の視線は、そのような強大な力に對する恐れだけであらうか。

船中で汪得貴はこう語る。「學問をなさつたお方は人のために公平

な話をなさるもんだ。例えば誰かが大勢の侮りを受けたら、あのお方たちがお出ましになつて、公平な話をなさるのさ」(岸本二七、二八頁)。

學問をし文字を知つてゐる人として、まさに「公正な點で輿論の支持をうけてい」たのである(仁井田三五九、三六〇頁)。

一般に郷紳と呼ばれる人々は、科擧試験に必要な教養を身につけて科擧資格をもつていた。そして科擧に合格することは、合格者の人格的優越性の公的な認知を意味したという(岸本二八、三三頁)。

愛姑もまた船中であらう語る。「あのお方は慰老爺のように話がわからず『別れたがいい、別れたがいい』としか言わないはずはない。あたし七大人にこの何年もの苦しみをお話しするんだ、それでどちらが正しいとおっしゃるか、見てやるんだ」(岸本二八、三三頁)。

愛姑は七大人に「お前が正しい」と言つて賞うことを期待している。

岸本によれば「多くの人々が『有望株』との結びつきを求めて結集し、そのこと自體が郷紳勢力を形成してゆく」という(岸本五三頁)。

七大人に寄せる人々の信頼が大きくなればなるほど、人々の恐れる權力も増大してゆく。巨大な力に對する怖れと期待、愛姑の抱くこのような二律背反する七大人への感情は、明清から民國期に至るまで、共同體の人々が、彼のような土地の有力者に對して寄せた思いを過不足なく表している。

愛姑の望みは「あつちの奴らをばらばら『原文『家敗人亡』』にししてやる」ことであつた。自分が離婚に應じて、婚家にとつて都合のいい結果にはしたくない、というのである。そのために愛姑の胸中では、七大人に縋る期待の方が怖れよりもまさつてくる。それゆゑ七大人の前に出る際、愛姑の頭に浮かんだのは、「學問をなさつたお方は公平な話をなさるもんだ」という言葉である。實はこれは、船中で聞いた

汪得貴の受け賣りにすぎない。だが愛姑はそれに氣付いていない。しかも當の七大人に向かつてこの言葉を繰返し口にする。まるでそれが愛姑を救う唯一の呪文でもあるかのよう。

しかし右にみてきたとおり、彼女の前に立ちふさがっているのは巨大な力である。父親でさえ今回は腰が引けている。七大人は、この時代の若い農村の女性が一人で太刀打ちできる相手ではない。愛姑はどのように行動したであろうか。

三三 愛姑の奮闘

愛姑が怖れと期待を抱いて向かった慰家の客間は、大勢の客でごった返していた。慰老爺は、七大人の意向で賠償・扶養料を十元上乗せして九十元に上げるからと、この場で愛姑に離婚の承知を迫る。

愛姑は追い詰められる。彼女が望んだのは金銭ではない。れっきとした正妻である自分に落ち度はない、理不盡な婚家を追い詰めてやりたい、彼女にはその一念があるだけだった。七大人は丸い頭と血色のよい容姿で、客たちに「屁塞」を見せて「昔の人が納棺のときに尻の穴に詰めたものだ」と濫蓄を傾け、周りは眞面目に拜聴している。愛姑の目にはそれが親しみやすいと映り、思い切って言い分をまくし立てる。

「七大人は、學問をなさったお方、ようくわかっておいでです。」愛姑は大膽になった。「あたしら田舎者とはちがいます。あたしには恨みがあっても訴えるところがなくて、ちょうど七大人にお目にかかって聞いていただきたいと思っておりました。あたしは嫁入りをしてこのかた、本當に入るのにも出るのにも頭を低くし

て、禮にはずれたことなど、これっぽっちもありませんでした。奴らは何かとあたしにはむかって、どいつもこいつもみんなひどい佛頂面。あの年いたちが大きな雄鷄をかみ殺したのだって、何のあたしがきちんと戸を閉めなかったものですか。あれはあのくたばりぞこないのかさっかきの犬めが、ぬか入りご飯を盗み食いしようとして、鶏小屋の戸を押し開けたんだ。それをあの『子畜生』は黒も白もわからずにあたしを張り飛ばして……」

「あたしには分かってる、それには理由があるんだ。それだつて七大人のご明察を逃れられるもんですか。學問をなさったお方は、何もかも御存知だ。あいつ「夫」はあの淫賣の色香に迷って、あたしを追い出そうつてんだ。あたしや仲人結納の手續き踏んで、花駕籠に乗って嫁入ったんだ。そう簡單にいくかい。きつとあいつらに目にも見せてやる。たとえ裁判に訴えたってかまうもんか。縣でだめなら府があるさ……」

しかし七大人は、愛姑の味方をしてはくれない。父親莊木三は黙っている。愛姑は自分が孤立してしまったことを知る。だが彼女は混亂した頭の中で「最後の奮闘」を決意し、再びまくしたてる。

「何だつて七大人まで……。」愛姑の目に驚きと失望の色が満ちた。「そうですとも……。あたし、わかっています。あたしは學問のない者は何にも知っちゃいないんです。おとつあんが人情も世渡りもわからずに、いつもぼんやりしているのを恨むだけです。それで『親畜生』や『子畜生』の思い通りにされちまって。あいつら、葬式の知らせみたいに慌てくさってこそそそ立ち回り、人

におべっか使って……。」

「七大人、ごらんください。」黙って愛姑の後ろに立っていた『子畜生』がふいに口をはさんだ。「こいつは大人の前でも、こんな調子でさあ。家でやられりゃまるっきり家畜まで落ち着きませんや。親爺のことは『親畜生』、あっしのは何かにつけて『子畜生』『私生兒』なんどと呼びやがる。」

「どこの『淫賣の子』があんたを『私生兒』って呼んだのさ」愛姑は振り向いて大聲で言い、また七大人の方に向き直って述べ立てた。「あたしはまだ皆さん方の前で言いたいことがありますだ。この人には禮やかなとこなんてありやしません。口を開けば『ろくでなし』だの、『げすやろう』だのと。あの賣女とくっついてからは、あたしの御先祖まで侮辱し出した。七大人、叱ってやっってください、この……。」

愛姑はこのように立ち向かった。この場面にはどのような特徴があるだろうか。

(一) 愛姑は七大人に向かって訴えていたのに、「あたしはまだ皆さん方の前で言いたいことがあります」と、いつの間にか、客間の人々を、聴衆、觀衆として意識するようになっていた。

(二) 正月なのに、「葬式の知らせ」などという、最も忌むべき不吉なことをまくしたてる。

(三) 禮教を重んじる、「大人」「老爺」などと呼ばれる人々の面前にもかかわらず、「逃生子」「娘濫十萬人生」「賤胎」「娘殺」などという、この場にあるまじき猥雑な言葉が飛び出す。

(四) 長幼の秩序を無視し、舅・夫を「老畜生」「子畜生」と呼ん

で罵る。

ここでは世間なみの作法や常識は無視され、日頃人々を厳しく縛る秩序は消滅している。そして神聖なものとし不吉・不道徳なもの、高貴なものとし下賤なものが結びつけられている。晴れ着をまとった大勢の人々が集う正月の客間で、必死でまくし立てる愛姑の周圍に、非日常のエネルギーに満ちた時空が出現している。この場面からは、例えば、魯迅が『朝花夕拾』『無常』に描いたような、祭りや芝居の空間に通底するものさえ感じられるように思われる。

それには紹興の方言・土語も大いに預かっている。魯迅は本作品において、わかりにくいものには自注をつけてまで、意圖的に方言を用いている。

董秋芳は、『彷徨』が出版されて聞かない一九二六年十月、作品「離婚」中の愛姑の言葉を、「祝福」中の祥林嫂の身の上を語る言葉、「孤獨者」の大良らの祖母の言葉と並べて、こう評した。「S市出身の私から見れば、誠に生きた人間が話すように、その聲を聞くが如く、姿を見るが如くであった。」しかし實は作品「離婚」中では、S市という地名は一度も出てこない。それでも愛姑の話す方言も、大良の祖母の言葉などと同様、紹興出身である董秋芳に、魯迅作品でお馴染みのS市という地名を思い起こさせるほど、リアルで生き生きとしていた、といえる。

周作人は『魯迅小説裏的人物』「離婚」において、作品中の慰老爺・七大人らのモデルとなった人物や土地、また屁塞のエピソードを巡って自分が見聞きしたことなどを、實に詳しく述べる。つまりこの作品は周作人に對して、子供時代の正月の記憶を呼び起こさせるような力

をもっていたのである。それには會話を多用したこの小説の言葉、方言も大きく關與していたと思われる。

さて夢中になってまくし立てていた愛姑は、後述するとおり七大人の突然の大声で心に冷水を浴びせられることになる。そんな愛姑の形象には、魯迅が愛した紹興の芝居の中で、調子に載って得意げに振る舞い、やがて鞭打たれる道化の面影も備わっているように思われる。

紹興の芝居では「生（男役）や旦（女形）は官話（すなわち書き言葉）を使うが、丑（道化）は方言を使う」という（裘士雄二〇〇頁）。魯迅によれば道化が方言を使用するのは、次のような理由による。

「警句あるいは煉話、風刺、洒落は、十のうち九まで下等人の口から出るので。だから必ず土語を用い、地元の觀客が徹底的に理解できるようにします。」

〈序〉で述べたとおり、この作品は従来「悲劇」と捉えられることが多かった。しかし實のところ、もしこれが芝居で演じられたなら、當時の人々——とりわけ紹興の觀客は、女性も含めて、「悲劇」どころか腹を抱え大笑いするのではないだろうか。日頃嚴しい秩序に縛られて生活している人々は、愛姑が土語を駆使して、先にあげたような秩序や權威に對するあべこべを繰り廣げるのを見れば、さぞ愉快で胸がすくに違いない。

萬物が再生し時が新しく入れ替わる正月、様々な身分・年齢の人々が集まる慰家の客間に出現したこの時空は、作品の核心部分である。もしも愛姑の罵詈雑言によるパフォーマンスが行われなかったら、この作品は盛り上がりのない評論か新聞記事のようになってしまふのではないか。作品はここをめざして書かれてきた。魯迅はこの場面を導かんとして愛姑を追い詰めたのである。

〈四〉結び

一、結末およびその意味
二、で引用した愛姑の奮闘は次のように突然收束する。

愛姑はぶるっと身震いをして、急いで口をつぐんだ。七大人がふいに兩の目をぐるりとむき、丸い面を起すや、細く長いひげに圍まれた口から長く引きのばした大声が發せられたからだ。

「これくくへ」七大人は言った。

愛姑は一瞬心臓が止まり、ついできどきと跳ねるのを感じた。大勢はすでに去り、局面は變わってしまったらしい。足を滑らせて水にはまったかのようなであった。だがこれは實に自分が間違っていたと知った。

青い長上着、黒いチョッキの男がすぐに入ってきて、七大人に向かい、兩手を垂れ、背筋をびんとのばして、棒のようにつっ立った。

客間全體がしんと静まりかえっている。七大人が唇を動かし、何を言ったのか誰にもはつきりとは聞こえなかった。だがその男はもう聞き取っていた。その上この命令の威力が、はや骨の髄にまで染み入ったようで、身の毛もよだつとばかりに體を引きつらせて「はっ」と答えた。彼は數歩後ずさりして、身を翻して出て行った。

愛姑は思いもかけないことが到來しそうである、と悟った。それは全く豫想もつかず、防ぎきれもしないことだ。愛姑はこのときようやく、七大人には本當に威嚴が備わっているのであること

を理解した。これまでのことはすべて自分が思い違いをしていた。そのため自分はいかに我儘で粗暴すぎた。愛姑は大いに後悔し、覺えず自ら口を開いた。

「あたしは元々七大人のお言い付けに従うつもりで……」

このとき愛姑は、まざまざと見せられた「力」への恐れに捕えられている。右の描寫はそれをくっきりと傳えている。使用人のかしこまった動作までもが「この命令の威力が、はや骨の髓にまで染み入ったよう」「身の毛もよだつ」と描寫される。そこには、驚いて使用人を凝視する愛姑の心が寫し出されている。

愛姑は十五で嫁入りし、この騒動で採めて三年、數え年でまだ二十歳前の可能性もある。その視線にも幼さが見え隠れする。例えば慰老爺の客間に入った途端、彼女の目は七大人の丸い頭や髯などに、ついでその手にある「屁塞」や仕草に吸い寄せられる。その視線には、彼女の大きな不安とともに、「珍しいもの」に注がれる子どもっぽい露骨さも感じられる。七大人はそんな愛姑を、いかにすれば恐れ入らせることができるか心得ており、やすやすとそれをやってのけた。

慰老爺の方は、この日もこれまでどおり愛姑に婚姻生活の實質的な破綻を説いて説得した。「愛姑は、夫とは合わず、舅姑には氣に入られず」という彼の説得はしかし、愛姑の耳にはずっと「別れたがいい」というワンパターンの言葉にしか響いてこなかった。七大人の、「上海」「北京」「外國」、果ては「北京の洋學堂」歸りの少爺まで引き合いに出した説得も、やはり愛姑の心には全く傳わらず、逆に「最後の奮闘」を決意させた。

だが、今まで聞いたこともない「長く引きのばした大聲」と、かし

こまった使用人の様子に、七大人の力を體感して、初めて愛姑は、震え上がった。その結果思わず「あたしは元々お言い付けに従うつもりで」と口にする。その言葉で、即座に賠償金が莊木三に手渡された。

父親が金を數えている間、愛姑は七大人が鼻の穴に嗅ぎ煙草を詰める様子から目が離せない。何かが起こるのでは、という恐怖で目を見開いているのである。父親が金を數え終わると、愛姑は慰老爺の慰留を斷り、父と二人で早々に屋敷を辭す。七大人の恐ろしが「骨の髓にまで染み」たといえる。「心臓が止ま」るほどの恐怖を感じ、「これまでのことはすべて自分の思い違い」「あまりに我儘で粗暴すぎた」と、打って變わって反省までしたこの時のことは、後々まで彼女の腦裏に残るだろう。この経過からみて、「あそこでやめず、もっと言つてやればよかった」とは、かりそめにも思わないのではないか。むしろ思い返す度に、ああ「思いもかけないことが到來」しなくてよかった、この程度で済んでよかった、とほっとするに違いない。つまり仲介者の説得によってではなく、その大音聲によってではあるが、愛姑の意地即ち「賭氣」は消滅した、消滅させられたといえる。

しかし、結末があらわにしているのは、個人の葛藤など強大な力に對してひとたまりもない、という現實、思いをとげられなかった愛姑の哀れさのみであろうか。

本作品は題名こそ「離婚」であるが、逆に中味の方は舊い共同體の舊式の婚姻にまつわる話で、實質的には「休妻」と呼ぶべき出來事である。しかし愛姑側は單に「休」されたわけではなく、十元上積みされた九十元の賠償・扶養料を得た。この時代紹興での結納金の額は、一四、五歳の娘なら、嫁入りまで毎年銀十元くらいであったという事情(裘士雄四九頁)は、九十元という金額の大きさを知らぬのに有效か

もしれない。愛姑が船中で言うところによれば、父親莊木三は、十元上積みされるより前の金額八十元に、すでに「目が眩んで」いた、という。「海沿いの三六十八ヶ村、誰知らぬ者のない」「どんな大きなお屋敷にでも入って行けるお方」莊木三にしても、これは大金だった。慰老爺がさらに十元の上積みを告げ、七大人がじろりと一べつをくると、莊木三は愛姑に一切加勢はせず沈黙している。相手の施家にとつては、いかにそれを支拂う力があつたとはいへ、七大人に上乘せを要求されて、九十元の出費になつたことはやはり相當な痛手である。

愛姑への賠償・扶養料である大金は、有力者二人の立會いのもと、大勢の見ている前で、父親莊木三に渡された。父親が近隣に聞こえた存在である以上、當の父親にしろ兄にしろ、もし愛姑を扶養しなかつたり、金のために本人が望まない再婚を迫つたりすれば、今回の騒動がそうであつたように、すぐに一帯に傳わるであろう。それでは莊木三の三六十八ヶ村に聞こえた名前に大きな傷をつけることになる。よつて舊い農村社會とはいへ、少なくとも經濟面で「家を出てからどうなつたか」の心配は、愛姑には當面無用と言つて差し支えないだろう。

もし假に愛姑が屈服せず、この奮闘に勝利すれば、「離婚」は成立せず彼女は當然施家に戻らねばならない。愛姑は相手をほろぼろにすること（「人家敗」）が望みで、「あっちへ戻りたいわけじゃな」かつた。そんな彼女にとっては、今ははからずも「賭氣」も消え、その置かれた境遇からすれば、これ以上の結末はありえないのではないか。〈序〉で紹介したような、本作品を一律に愛姑の敗北を描いた「悲劇」と位置づける見方は、右のような點からもあてはまらないように思われる。

二、「下等人」のことばの力

〈序〉で述べたように、書き出しのめでたさとは裏腹に、主人公愛姑は、瀬戸際に追い詰められている。それは同じく〈序〉で例示した他作品の男性登場人物、例えば「祝福」の「私」、「孤獨者」の魏連亓、「傷逝」の涓生らが迫られたような、思想や生き方の根幹に關わる問題ではなかつた。しかし、婚姻問題において農村の若い女性が、大きな力をもつ仲介者を前に、自分の力でどこまで意地を通すことができるかという局面は、舊社會の女性にとつてはやはり生存に關わる、だが、ほとんど見込みのない状況であつた。

そこに血路を開かんとした愛姑の口から「鑽狗洞」「娘濫十萬人生」「賤胎」「娘殺」などという言葉が飛び出すに及んで、前節で述べたとおり、七大人はふいに耳慣れぬ大聲を出して彼女を威嚇する。それ以上風紀を亂す言葉を喚かせ続けるわけにゆかず、また理屈による説得では通じないと認めたからである。

しかしこの一刹那、七大人は愛姑によって、彼女の土俵まで引き摺り下ろされたとは言えないか。追い込まれた愛姑の、窮鼠猫を噛む奮闘の結果、文字を知る階層の理屈っぽい言葉の限界が、ここでほんの一瞬ではあるが、あらわにされた、と言えないか。そして魯迅は結局まさにそのために愛姑を追い詰めたのではないだろうか。

作品「離婚」が執筆・發表されたのは一九二五年十一月である。この時期、魯迅はこの作品の掲載誌「語絲」のほか、自ら編集した『莽原』、他に「猛進」などで、激しい論陣を張っていた。それは現代評論派との女師大事件を巡る論戦であり、また章士釗主編の『甲寅』など、復古主義の壓力に對する應戦でもあつた。魯迅はそれらの雜文の題名や文中に、たくさんの俗語、下世話な言葉や言い回しを用いた。

例えば『ひげ』から話は「齒」に落ちる^⑧では、保守派を攻撃する文章の中で、「腋の下や股間の毛」「直腸のそば」の「膀胱」などの言葉が並ぶ。「閑話などにはあらず」でも、女師大校長楊蔭楡の一派を罵って「糞便の榮光を高め、蛆蟲を聖なるものに變える」などという言葉を用了^⑨。

さらに『他媽的』について。罵語を題名に据えた點も、あろうことかそれに「國罵」という稱號を與えたことも、文中で用いられた言辭の威力も、今讀んでも斬新で強い印象を受ける。當時も「早速ある若い道徳家が、世の中に有毒な氣がたちこめでもしたかのように、大いに嘆息したものだ。それでも身分に恥じないのか、と」という反應を呼んだほどであつた^⑩。

魯迅が同文で述べたとおり、「他媽的」という言葉を「口にするのは、いわゆる『下等人』だけであつて例えば『車夫』などである。身分の上等人、例えば『士大夫』などは決して口にはしない。いわんや書物に書くなどということは」なかつた^⑪。

罵り言葉の他、俗語、土語、更には肉體や身の回りの下品で下世話な事柄なども、さしずめ「下等人」の言葉と言えらる。それを「身分の上等人」が用いる文字に記し書物に書けば、それだけで大きなインパクトを生じる。魯迅はそんな言葉の力を、自身の文章で十分に生かした。それはまた言葉についての「生きている人間の唇と舌を源泉とし、文章を一層言語に近づけ、一層生氣あるものにすべきである^⑫」という考えに基づいていたと思われる。

愛姑は、老爺・大人の前で猥雑な言葉を吐き、正月なのに禁忌を犯して縁起でもないことを言い、夫や舅の權威を剥ぎ取って罵りの對象とした。それらは愛姑にとってはお馴染みの言葉や行爲で、夫の言い

分によれば、かつて婚家で散々に喚いたものだった。〈序〉で觸れたように、これらの點を愛姑の粗野、横暴と評し、さらにこうして「反抗」したのに遂に「屈服した」などとして、作者が愛姑の形象を用いて國民性の負の部分暴露したのだという見方がある。

しかし魯迅は愛姑の言葉や行爲を小説に持ち込み、正月の慰老爺宅の客間に配置することによって、日常とは異なつた意味と輝きを帶びさせたのである。前節で確認したとおり、慰老爺、七大人の、理屈、道理による説得は、愛姑には通じず、かえつて愛姑から場違いな猥雑、下品、不遜、不吉な言葉を引き出した。のみならず、それによって、七大人たち「身分の上等人」のもつ言語や理屈の限界があらわにされた。そして愛姑のこのような言葉は、「舊いものを破壊し^⑬」て、小説のより自由な可能性を押し廣げ、掲載誌『語絲』に、そして文學の場に新たな生氣をもたらしている。ここには魯迅が後に述べた「話したことばと文章語がますます重なり合い」、「文學が尙一層精彩を放つ^⑭」ような場が生み出されているのである。

だが日常の秩序を無化する存在は追放されなければならない。たとえ作品「離婚」が悲劇ではなく喜劇であつたとしても、秩序を破つた者が追放されて初めて劇は完結する。作品「宮芝居」中の少年達も道化が鞭打たれる場面を喜んだ^⑮。観客は秩序の側にいるのである。かくて愛姑は慰老爺宅の客間から黙然と去る。これにて裂け目は閉じられ共同體は舊に復する。しかし愛姑が生み出した土語による罵詈雑言の時空、「下等人」のことばの力は、今も作品の中から我々を強くゆきぶり續けている。

注

(1) この點は登場人物を「色々な堪らない境遇に置いて試練し其の表面にある潔白さを剥取って下に隠して居る罪惡を拷問し出す」と魯迅が述べる、ドストエフスキーの創作態度と重なるものがあるかも知れない。「ドストエフスキーのこと」原載『文藝』一九三六年二月號、『且介亭雜文二集』所收、『魯迅全集』第八卷學習研究社一九八四年による。

「孤獨者」「傷逝」については拙論「魯迅『孤獨者』論」(『野草』第五九號、中國文藝研究會一九九七年二月)、「魯迅『傷逝』論上・下」(『野草』第六八、六九號、二〇〇一年八月、二〇〇二年一月)参照。

(2) 日本には管見の限りこの作品のみを論じた作品論は見あたらない。仁井田陞は一九四七年、「華北農村の法的慣行の實態調査」を主資料とし、本作品も題材にして「中國農村の離婚法慣習」(原載『中國研究』第二號一九四七年十一月、參考文獻参照)を論じた。また竹内好は次のように述べる。「婚家との折合いが悪くて一方的に離婚された女が、氣丈に人格の獨立を主張するが、結局、土豪や官僚の勢力に取りまかれて環境に屈伏を餘儀なくされるまでを、人物の動きの客觀的描寫だけで押し切って、無駄なく浮き彫りに仕立てた佳作である」(『魯迅入門』東洋書館一九五三年、『竹内好全集』第二卷、筑摩書房一九八一年による)。また藤井省三は次のように本作品を評價する。「『藥』や『長明燈』『波紋』と同様に登場人物達の輕妙な會話を通じて、農村における人間關係と權力構造を巧みに描き出している」(『魯迅事典』三省堂二〇〇二年)。一方中國では一九四〇年の毛澤東による魯迅評價の後、一九四一年一月に、延安で須旅の「辛亥的女兒——一九二五年的『離婚』」(『魯迅研究叢刊』第一輯、魯迅文化出版社、『魯迅研究學術論著資料匯編三』中國文聯出版公司一九八七年による)が出て、以後の批評の基調となった模様である。須旅は大略次のように述べる。本作品は「封建的婚姻を否定したものである。農村における封建的經濟搾取も強く反映されている。愛姑には『人格』に對する覺醒の萌芽」が見られ、魯迅は愛姑

の「農民的な粗野な勇氣を盡した」。しかし「愛姑の鬭争は自覺的なものではなかつた」。彼女は「自分の『人格』の爲に封建勢力と鬭つた。しかし敗れた」。彼女の敗北は「封建勢力の高壓のもと、孤軍という状況のもと、必然的であつた。彼女は新しい主力となる運動に依ることによつてのみ、そして鬭争を更に質の高いものにしてこそ、ようやく勝利を得られるのだ」。

秦林芳の「重讀魯迅『離婚』」(『中國現代文學研究叢刊』一九九四年第四期)は、右の須旅「辛亥的女兒」について、「割合早くに出て代表的要素が強く以後の研究に與えた影響も大きい」と評した。そして「近年續々と出ている」「異なつた角度から須旅の見方を肯定し發展させたもの」として以下の四論文を例にあげた。孫昌熙・韓日新「論『離婚』」(『文史哲』一九八七年第五期)、葛中義「爲愛姑一辯」(『魯迅研究動態』一九八八年第二期)、吳組細「說『離婚』」(『中國現代文學研究叢刊』一九八五年第一期)、林志浩「論『離婚』」(魯迅小説創作中的意義」(『魯迅研究』下、中國人民大學出版社一九八八年)。

秦が挙げた四論文の他に須旅の見方を踏襲したものととして、五十年代には許傑「離婚」(『魯迅小説講話』泥土社一九五一年)、李桑收「魯迅小説中舊中國婦女的形象」(『魯迅小説論集』一九五六年)など。また八十年代では例えば次の諸論に、須旅の論に重なる部分が見られる。顧農「說『離婚』」(『語文教學與研究』一九八二年第四期、『復印報刊資料』「魯迅研究」一九八二年第九期)、林興宅「『離婚』與『小公務員的死亡』的比較分析」(『魯迅研究(雙月刊)』一九八三年第三期)、陳祖楠「『離婚』的思想」(『紹興師專學報』社科版、一九八五年第二期、『復印報刊資料』「魯迅研究」一九八五年第八期)、林非「論魯迅的『離婚』藝術技巧的得失」(『河北學刊』一九八六年第二期、『復印報刊資料』「魯迅研究」一九八六年第二期)、左全安「『離婚』論」(『貴陽師專學報』一九八九年第二期、『復印報刊資料』「魯迅研究」一九八九年第三期)など。

秦も「重讀魯迅『離婚』」で触れたとおり、八十年代まで本作品は大よそ次のように捉えられてきた。愛姑という現代的な自我意識に目覺めた農村女性が、人としての權利を勝ち取るために封建勢力と戦い、敗北し屈服させられる「悲劇」である、また魯迅は愛姑に同情を寄せており、彼女を愛している。

一方、秦の見方は次のようなものである。「愛姑は覺醒していない女性」であり「辛亥の女兒」と呼ぶことはできない。「その反抗のやり方と目標は、濃厚な封建的色彩を帯びていた」。彼女の「粗野、横暴、淺はか、惡辣な一面は、魯迅が力を盡くして國民性の負の部分に批判した表現である」。「強大な封建勢力に勝つには現代的な民主の勝利を實現しなければならず、引き続き『思想革命』を行い、『國民性の改造』を行わねばならない」。

同様に愛姑の缺點を擧げて、それを魯迅による國民性批判に結びつけたものとして、袁盛勇・張桂芬「『離婚』的敘事分析及其文化意蘊」(『魯迅研究月刊』二〇〇三年第五期)がある。他に唐復華「魯迅的『尋根』——讀『弟兄』和『離婚』」(『魯迅研究月刊』二〇〇三年第七期)は、これまで封建勢力という悪とされてきた七大人を「水準が高い」と評價する。張華「『離婚』的空間形式及其文本解讀」(『上海魯迅研究』第十四號、上海魯迅記念館二〇〇三年五月)は、愛姑の悲劇の源は「他人や社會との深い隔絶である」とする。また作品には「作者の彼女に対する期待と賞賛が表れている」と述べ、この點ではむしろ須旅の見方に重なっている。

陳亞亞「外部的黑暗、還是黑暗的內部——魯迅筆下女性深層心理活動分析」(『魯迅研究月刊』二〇〇三年第十二期)は、ボーボワールを引用するなどして次のように愛姑を批判する。「愛姑は自分を獨立した人格をもつ主體としてみたことはなく、自分の價值に他者の承認と肯定を必要とする。花かごに乗って正式に結婚した正妻だ、と自分のことを強調

するのは、自分を物としての地位に置くものだ」。

いづれにしても中國では、愛姑が老爺、大人ら封建勢力に敗れた悲劇であるとして、なぜ敗れたのかを探る方向で論じられることが多かった。

(3) “阿阿、木叔！新年恭喜，發財發財！”“你好，八三一恭喜恭喜！……”。唉，恭喜！愛姑也在這裏……”。

(4) “愛姑回到那邊去，其實呢，也沒有什麼味兒……”。

(5) “我倒並不貪圖回到那邊去，八三哥！”“我是賭氣。”

(6) “他老人家也出來說話了麼？……那是……。其實呢，去年我們將他們的竈都拆掉了，總算已經出了一口惡氣。”

(7) 仁井田三九四頁。また周作人は『魯迅小説裏的人物』二二六、拆竈

(周作人二三九頁)においても、竈かまどこわしおよび械闘について次のように述べる。「大きな竹竿を竈のたき口かまどに突き入れ、大勢で力任せに上方

に持ち上げて」壊す。「竈はその家で最も尊い存在であり、竈が壊されたら、まるっきりおしまいである。名譽を回復したければ、新規巻き直して反撃に打って出るしかなく、さもなければ人が調停に立つが、それは

屈服和解を意味する。」

(8) “打官司打到府裏，難道官府就不會問問七大人麼？”

(9) “已經鬧了整三年，打過多少回架，說過多少回和，總是不結局……”。

(10) “這裏沿海三六十八村，誰不知道？”“你老人家是高門大戶都走得進的。”

(11) “他們知書識理的人是專替人家講公道話的，譬如，一個人受眾人欺侮，他們就出來講公道話。”

(12) “他不能像老爺似的不通，祇說是，走散好走散好。我倒要對他說說我這幾年的艱難，且看七大人說誰不錯！”

(13) 九十元を賠償・扶養料と解釋するのは、仁井田三二五頁による。

(14) “七大人是知書識理，頂明白的；她勇敢起來了。”“不像我們鄉下人。

我是有冤無處訴；倒正要找七大人講講。自從我嫁過去，真是低頭進，低

頭出、一禮不缺。他們就是專和我作對，一個個都像個、氣殺鐘馗。那年的黃鼠狼咬死了那匹大公雞，那裏是我沒有關好嗎？那是那祇殺頭癩皮狗偷吃糠拌飯，拱開了鷄欄門。那、小畜生、不分清紅皂白，就夾臉一嘴巴……”

“我知道那是有緣故的。這也逃不出七大人的明鑒：知書識理的人什麼都知道。他就是着了那盞姨子的迷，要趕我出去。我是三茶六禮定來的，花轎抬來的呵！那麼容易嗎？……我一定要給他們一個顏色看，就是打官司也不要緊。縣裏不行，還有府裏呢……”

右の傍線部（引用者による）は、愛姑が「定婚と成婚の禮を具えて娶られ」た、妻たる「獨占的排他的」な「名分」を有することを示す。逆にこのような手續きを踏まない情交は「すべて姦として、社會的にも指彈され、法律によっても處罰された」。（滋賀秀三『中國家族法の原理』四六七、四七四頁、創文社一九六七年、二〇〇〇年第五刷による）愛姑が自分の正當性を主張し、夫側をなじる根據はここにある。

(15) “怎麼連七大人……” 她滿眼發了驚疑和失望的光。“是的……我知道，我們粗人，什麼也不知道。就憑我爹連人情世故都不知道，老發昏了。就專憑他們，老畜生，小畜生，擺布；他們會報喪似的急急忙忙鑽狗洞，巴結人……”

“七大人看看，” 默默地站在她後面的“小畜生”忽然說話了。“她在大人面前還是這樣。那在家裏是，簡直鬧得六畜不安。叫我爹是，老畜生，叫我是口口聲聲，小畜生，逃生子。”

“那個，娘濫十萬人生，的叫你，逃生子，？” 愛姑回轉臉去大聲說，便又向着七大人道，“我還有話要當大眾面前說說哩。他那裏有好聲好氣呵，開口，賤胎，閉口，娘殺。自從結識了那姨子，連我的祖宗都人起來了。七大人，你給我批評批評，這……”

(16) 本作品とは洋の東西を異にはするが、この場面にはパフチンが「ドストエフスキーの詩學」にいう「カーニヴァルの世界感覺」に通じるもの

が感じられる。パフチンは述べる。「カーニバル的生」においては「社會のヒエラルヒー構造と、それにまつわる恐怖、恭順、崇敬、作法などといった形式」が取り拂われる。その結果、「カーニバル的接觸や結合」が生じ、「神聖なものと冒瀆的なもの、高いものと低いもの、偉大なものと下らぬもの、賢いものと愚かなもの等々を近づけ、まとめ、手を取り合わせ、結合させるのである」。このような「カーニバルのカテゴリ」は、「何千年にもわたって文學に、特に對話的系列の散文小説の中に移し換えられてきた」。

またカーニバル劇の「中心的な舞臺となり得るのは廣場のみであった」。慰老爺宅の客間は、パフチンの言う「カーニバル化された文學における廣場」と重なるものがあるかも知れない。（ミハイル・パフチン『ドストエフスキーの詩學』望月哲男・鈴木淳一譯二四七〜二五九頁、ちくま學藝文庫一九九五年）。

また本稿は〈序〉における問題提起も同書の影響を受けている。

(17) 本作品中次の二語には下の（ ）内の魯迅の原注がある。「對對」「對不起對不起」の略、あるいは「得罪得罪」の合音。未詳。）「逃生子」（私生兒）。

謝德銜『魯迅作品中的紹興方言注釋』（浙江人民出版社一九七九年一八頁、本稿では一九八三年の采華書林版を参照）は人名「汪得貴」も紹興方言にその由来があると述べる。他に金紀賢「試論魯迅小説與紹興方言」（『紹興師專學報』社科版、一九八三年第三期、「復印報刊資料」『魯迅研究』一九八四年第四期）、楊克人「文學與方言初探」（『京都外國語大學研究叢書』一九九五年第四五號）などでも本作品中の方言に言及。

魯迅は「門外文談」で次のように述べており、方言の力を意識して用いたと思われる。方言や土語には「意味深い言葉があり、故郷では、『煉話』と呼んでいる。使うととても面白く「中略」、聴いても興味津々に感じる。」（原題同じ、一九三四年八月二四日〜九月十日『申報』「自

由談、一九三五年天馬書店、『且介亭雜文』所收。)

(18) 《祝福》裏面關於祥林嫂的故事之報告，《孤獨者》裏面，大良們的祖母的關於連父的身後議論，《離婚》裏面，愛姑的自白，從S城出身的我看来，正是一樣的活人說話，如聞其聲，如見其人丁。(董秋芳『彷徨』續) 原載『世界日報副刊』一九二六年十月十九日、『魯迅研究學術論著資料匯編』第一卷中國文聯出版公司一九八五年による)

(19) 周作人は龐莊を、彼らが毎年新年の挨拶に出かけた父方のお婆の嫁ぎ先、馬家のあつた吳融だとする。小説同様船から目印の魁屋閣が見えたという。七大人のモデルは、年始の際、吳融で會した章介千で、容貌や役人風を吹かす所も小説の通りだという。一方漢代の玉を愛好したのは、章介千の同族の章采彰で、七大人の第一聲「これがすなわち『屁塞』だ、昔の人が納棺のときに尻の穴に詰めたものだ」とは、この男が言った言葉どおりだ、と述べる(周作人三三七、二三八頁)。

(20) 是警句或煉話，譏刺和滑稽，十之九是出于下等人之口的，所以他必用土話，使本地的看客們能够徹底的了解。『劇』週刊編集者への回答(原題「答『戲』週刊編集者信」、『中華日報』副刊『戲』週刊第十五期一九三四年十一月二十五日、『且介亭雜文』所收)

(21) 愛姑が最下層の女性では有力者に反駁する場面は作り出せない。この場面の爲にその父親に力がある主人公を据えたいと思われる。船中にはほかに、愛姑を見て互いに顔を見合わせ、唇を突き出し頷き合う二人の老婆がいる。老婆たちは無言だが、愛姑の置かれた客觀的狀況を示唆している。だが作品では遠景に押しやられている。

(22) 她打了一個寒噤，連忙住口，因為她看見七大人忽然兩眼向上一翻，圓臉一仰，細長胡子圍着的嘴裏同時發出一種高大搖曳的聲音來了。
來……冷！七大人說。

她覺得心臟一停，接着便突突地亂跳，似乎大勢已去，局面都變了；彷彿失足掉在水裏一般，但又知道這實在是自己錯。

立刻進來一個藍袍子黑青心的男人，對七大人站定，垂手挺腰，像一根木棍。

全客廳裏是『鴉雀無聲』。七大人將嘴一動，但誰也聽不清說什麼。然而那男人，却已經聽到了，而且這命令的力量彷彿又已經進了他的骨髓裏，將身子牽了兩牽，『毛骨聳然』似的；一面答應道：

“是。”他倒退了幾步，才翻身走出去。

愛姑知道意外的事情就要到來，那事情是萬料不到，也防不了的。她這時才又知道七大人實在威嚴，先前都是自己的誤解，所以太放肆，太粗獷了。她非常後悔，不由的自己說：

“我本來是專聽七大人吩咐……”

(23) “愛姑既然丈夫不對，公婆不喜歡……”

(24) この後慰老爺は莊木三がまだ數えていない金の中から、少し取り出して「老畜生」に戻してやる。これはなぜか。筆者は結納金分を戻した、と考えていた。しかし丸尾常喜氏より次のようなご教示があり、深謝してここに記したい。「七大人は愛姑側がどうしても承知しないようなら更に上乗せもやむなしと考え、施家に九十元より多く金を包ませていた。その上乗せ分を戻して、九十元になるようにした。」

(25) 上海の商務印書館發行の『婦女雜誌』は、章錫琛編集長のもと、第八卷一九二二年四號を、「離婚問題號」という特集號として出し、大きな成功を収めた。以後、同年六號「産兒制限號」、第九卷一九二三年一號「婦女運動號」、同年三號「娼妓問題號」同年九號「家庭革新號」、同年十一號「配偶選擇號」、第十卷一九二四年六號「職業問題號」、同年十號「男女理解號」、第十一卷一九二五年一號「新性道德號」、同年六號「女學生號」など、特集が次々と組まれ、部數を伸ばした。『婦女雜誌』は月刊で、號數は基本的に發行月に同じ。本作品の題名「離婚」は、この時代、これらの特集号の題名と同列にある、いわば都會の青年男女の流行語である。

(26) 愛姑の目にこの日施家の父子が「半年前たまたま見かけた時と比べると明らかに年寄りじみて見えた」ことには、金策による心労も暗示されているように思われる。とはいえ仁井田陞は、妻を離婚するのは「離婚しても家事に困らず、経済上再娶の目安のある者である」と述べる（仁井田三二八頁）。一般の農民にはそれは不可能であり、また「門當戸對」の原則から、施・莊兩家は同じレベルの家であると推測している（仁井田三二二頁）。

(27) 魯迅は一九二三年十二月二六日北京女子高等師範學校で「ノラは家を出てからどうなったか」と題し、イブセン『人形の家』を題材に講演した。（原題「娜拉走后怎樣」、講演記録の原載は同校の『文藝會刊』第六期一九二四年。同年八月『婦女雜誌』第十卷八號に轉載。「墳」所收。）主人公ノラが家を出た後は、經濟的支えがないために、身を墮とすか家庭に戻るかしか道がない、などの内容であった。

(28) 注(2)で挙げた既出論文でも、本作品を「悲劇」と論じるものが多い。また短い作品紹介などでは特に、本作品を「悲劇」と紹介することが多い。例えば魯迅博物館魯迅研究室編『魯迅年譜』（人民文學出版社一九八一年、二〇〇〇年増訂版第二卷二五三、二五四頁）は「大膽果敢な農村女性愛姑が夫の侮辱に反抗したが、遂に敗れる悲劇」と述べる。他に周慶基「愛姑の悲劇」、『名作欣賞』北嶽文藝出版社一九八五年第一期、『魯迅作品賞析大辭典』「離婚」一二二頁（一九九二年四川辭書出版社）など。

魯迅自身は後に本作品についてこう述べる。「外國の作家の影響を脱け出し、技巧はいささか圓熟し、描寫もやや深まったものの、「情熱は減少し、讀者の注意を引かなくなった」(『中國新文學大系』「小説二集」序、良友圖書印刷公司一九三五年、『且介亭雜文二集』所收。情熱が減少した、とは、自らの自覺というより、讀者の側に立っての判斷かも知れないが、この作品が、社會の病苦を暴くといった意圖に基づいたもの

でないことを自ら述べているようにも思われる。

また本作品が掲載された『語絲』第五四期は創刊一周年で、厚さは通常の五倍の四十頁、掲載作全十七編中、一周年を祝う記念する意圖が文中に示されているものが、次のとおり三篇ある。徐祖正の一幕劇は「生日的禮物」と題され、「『語絲』に贈る」と添え書きがある。章衣萍は作品「愛麗」に次のような付記を付けた。「『語絲』の一周年記念なので、同人達は皆喜んで文章を作り、この一歳の子供の爲に記念號を出す。」顧頡剛は採録した民歌を「吳聲戀歌」と題し、その詞書で「『語絲』の一周年記念の増刊のために集めた」と述べる。

川島の回想「憶魯迅先生和『語絲』」(原載『文藝報』一九五六年第十六號、『魯迅回憶錄』散篇上冊、北京出版社一九九九年による)などによれば、この雑誌は創刊當初は賣れ行きの見通しが立たず、川島らは立ち賣りまでやった、また彼らは、『語絲』の内容、形式などについて魯迅の意見を求め、魯迅もこの雑誌に深い関心をもっていただけ、という。ゆえに魯迅も、『語絲』が無事一周年を迎えた祝いの號であることを意識して、第五四期に「離婚」を掲載したと考えられ、本作品がおめでたい始まり方をするのもそのためではないかと思われる。

(29) 原題「從胡鬚說到牙齒」(原載『語絲』第五二期一九二五年十一月九日、『墳』所收)。

(30) 原題「並非閑話」(原載『京報副刊』一九三五年六月一日、『華蓋集』所收)。

(31) 「我曾經做過《論他媽的!》」早有青年道德家烏烟瘴氣地浩浩曠曠了、還講身分麼?「半農のため『何典』に題記せし後に作る」(原題「爲半農題記『何典』後、作」、原載『語絲』第八二期一九二六年六月七日、『華蓋集續編』所收)。

(32) 説的也獨有所謂「下等人」、例如「車夫」之類、至于有身分的上等人、例如「士大夫」之類、則決不出之于口、更何況筆之于書。(原題

「論『他媽的』」、原載『語絲』第三七期一九二五年七月二七日、『墳』所收。

(33) 却將活人的唇舌作爲源泉，使文章更加接近語言，更加有生氣。（『墳』の後に記す、原題「寫在『墳』後面」、一九二六年十一月、『墳』所收）。

(34) 「わたしと『語絲』の顛末」（原題「我和『語絲』的始終」、原載『萌芽月刊』第一卷第二期一九三〇年二月、『三閑集』所收）。

(35) 「門外文談」（『門外文談』については注十七参照）。

(36) 「宮芝居」（原題「社戲」、原載『小説月報』第十三卷第十二號一九二二年十一月、『吶喊』所收）。

〈引用した参考文献〉

○仁井田陞『中國の農村家族』第七章「中國農村の離婚法慣習」（三二一頁～三五三頁）、第八章「中國の同族部落の械闘」（三五七頁～三九四頁）、

東京大學出版會一九五二年初版一九七八年復刊。

○岸本美緒『明清交替と江南社會』「明清時代の郷紳」（東京大學出版會一九九九年）。

○周作人『魯迅小説裏の人物』「彷徨衍義」（『魯迅研究資料之二』上海出版公司一九五四年）。本稿では叢書『周作人自編文集』（河北教育出版社）所收の『魯迅小説裏の人物』（二〇〇二年）を使用。

○菱土雄・黃中海・張觀達著、木山英雄譯『魯迅の紹興』（岩波書店一九九〇年）。（原書は『魯迅筆下的紹興風情』浙江教育出版社一九八五年）。

〈右記以外の参考文献〉

○丸尾常喜『魯迅「人」「鬼」の葛藤』岩波書店一九九三年 ほか